

# 鉢物栽培における 与作V1号の活用

福岡県朝倉農業改良普及所

松野孝敏

## はじめに

福岡県甘木市は県の中央部に位置し、南部を流れる筑後川によって平野部を潤されている豊かな農業地帯である。当市では野菜苗生産を発端にして、昭和40年代頃から草花苗、鉢物の生産が特異的に発展し、現在では西日本でも有数の鉢物・苗物産地となっている。昭和50年代前半までは鉢物需要の伸びが著しく、販売額も順調に拡大したが、同50年代後半から60年代に入ると消費者ニーズが多様化し、複雑化し、従来の生産活動では消費の急激な変化に対応しきれなくなっている。現在、甘木市農協鉢花部会には34名の生産者が加入し、共同輸送をはじめとする事業をおこなっている。

## 1. 鉢物生産における用土の実態

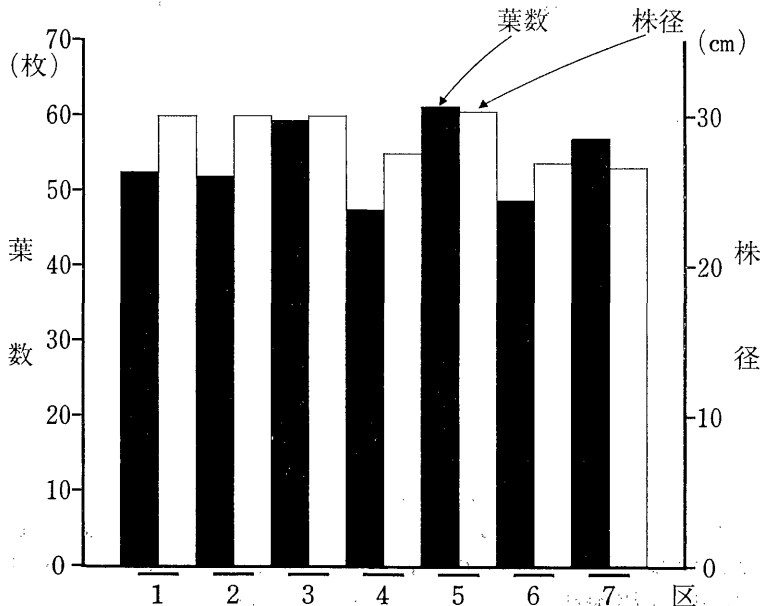
普及所では昭和60年度に専門技術員現地調査研究特別事業により、鉢物農家からの聞きとりによる用土の実態調査と、アンケートによる意向調査をおこなった。その中で明らかになった用土の実態は、(1)栽培品目によって用土の組成がかえられているが、それは必要性のあるものに限られており、ほとんどが同じ用土に植えられている。(2)同一品目であっても農家間で用土の組成が異なっている。(3)用土に占める田土、畑土、砂の割合が高いため製品が重い。(4)一部に用土の組成が複雑化しすぎているものがある。他であった。意向調査の結果では(1)用土で最も困っているのは良質の用土が安く、安定して入手できないことと、品目に合った用土の組成がわからないことである。(2)用土の調達時期と方法はとくに決めていない。(3)1鉢当りの用土代は6～15円の範囲としたい。(4)用土の混合はほとんどが定植の直前におこなっている。(5)用土づくりで最も注意しているのは物理性についてである。となった。このような用土の実態と農家の意向をふまえて、与作V1号の活用場面について検討を加えた。

## 2. シクラメン栽培用土の実態と与作V1号の活用

甘木市におけるシクラメン栽培農家は現在三戸である。用土の組成を調査すると第1表のような結果となった。A、C農家はプラスチック鉢、B農家は素鉢鉢を使用しており、それぞれに組成が異なっている。A農家では田土60%ときわめて保水性の高い用土となっている。B農家では山砂10%、粉碎杉皮30%が使われ、きわめて通気性の良いものとなっている。いずれの農家でも用土の組成が複雑化しているため、その性質がつかみにくくなっており、灌水をはじめとする日常の管理に熟練を要する。また、消費者の手にわたってからの管理もそれぞれ異なるものが必要となっている。そこで、用土の組成をよりシンプルなものとし、栽培を容易なものとするために与作V1号の活用を試みた。なおこの試験は福岡県施肥合理化協会の委託によるものである。

### (1) 試験方法

試験区は慣行土+与作、田土+砂+与作、それぞれについて割合をかえて比較し、対照区として慣行土区を設けた(第2表)。品種はパーパーク系では種は'83年9月用土の違いがシクラメンの生育に及ぼす影響(84年11月12日調査)



におこない、育苗は慣行土を用いておこなった。'84年7月12日に5号素焼鉢に定植して試験をおこなった。施肥灌水その他の管理は各区共通に慣行でおこなった。1区当り10鉢を供試し、試験は甘木市福光の西岡良一氏のビニールハウス内でおこなった。調査は株径と葉数についておこなった。

第1表 甘木市におけるシクラメン栽培用土 (%)

農家	田土	畑土	山砂	腐葉土	杉皮	もみ がら	みみず 糞	牛ふん 堆肥
A	60		30	5		5		
B		40	10	10	30			10
C	20		30	20		10		20

第2表 試験区における用土の組成比率

区	1	2	3	4	5	6	7
与 作	—	1	1	1	1	1	1
慣 行 土	1	1	2	3	—	—	—
田土+砂	—	—	—	—	1	2	3

- 慣行土の組成は田土20%山砂30%腐葉土20%もみがらくん炭10%牛糞堆肥20%
- 田土+砂はそれぞれ50%

(2) 結果および考察

用土の違いがシクラメンの株径に及ぼす影響を第3表に示した。定植約1ヶ月後の8月10日時点では慣行土の生育が優れた。11月12日の調査では、4、6、7区を除いてほぼ同程度の生育をした。生育の経過をみると、慣行土では後期の生育が優れるのに対して、与作を使った用土では初期の生育が優れている。次に、葉数に及ぼす影響を第4表に示した。5区の葉数が最も多く、次いで3区、7区の順となった。11月12日における各区の葉数と株径を第1図に示した。5区が葉数、株径とも最も優れ次いで1、2、3区が同程度の生育をした。与作V1号の混合割合とシクラメンの生育の間に一定の傾向は認められなかった。しかし、田土+砂+与作V1号のシンプルな用土で他の複雑な用土と同程度の生育をしたことから、与作V1号の利用によるシクラメン用土の簡素化は可能と考えられる。

3. 与作V1号の活用場面

用土による栽培の失敗事例は跡を断たない。それらの多くは用土の母材の変更によるものか、組成を複雑化しすぎたためによるものである。数多くの用土資材が販売され、その効果が宣伝されている。鉢物用土の具備すべき条件としてはまず安価であること、ついで供給が安定していること、さらに良質でありかつそれが安定していることの3つである。この条件に与作V1号をあてはめた場合第2、第3の条件は十分に満たしている。しかし、価格の面でやや問題が残る。そのため与作V1号の活用場面はシクラメンなどの単価の高い品目に限られる。さらに、利用量が少なすぎて育苗段階での活用が

第3表 用土がシクラメンの株径に及ぼす影響

単位：cm

区	8月10日	9月10日	10月12日	11月12日
1	17.6	20.4	24.7	29.7
2	16.9	22.2	27.5	29.8
3	16.5	22.4	28.2	29.7
4	15.6	21.3	26.6	27.3
5	15.8	22.4	26.1	30.5
6	15.9	20.1	23.1	26.6
7	15.5	20.2	23.5	26.3

第4表 用土がシクラメンの葉数に及ぼす影響

区	8月10日	9月10日	10月12日	11月12日
1	18.5	21.9	38.8	52.7
2	20.7	29.7	42.5	52.2
3	23.1	30.5	42.8	58.9
4	17.5	24.5	35.6	48.3
5	23.4	30.4	46.0	61.9
6	19.7	23.5	36.5	50.3
7	21.3	26.9	40.4	57.4

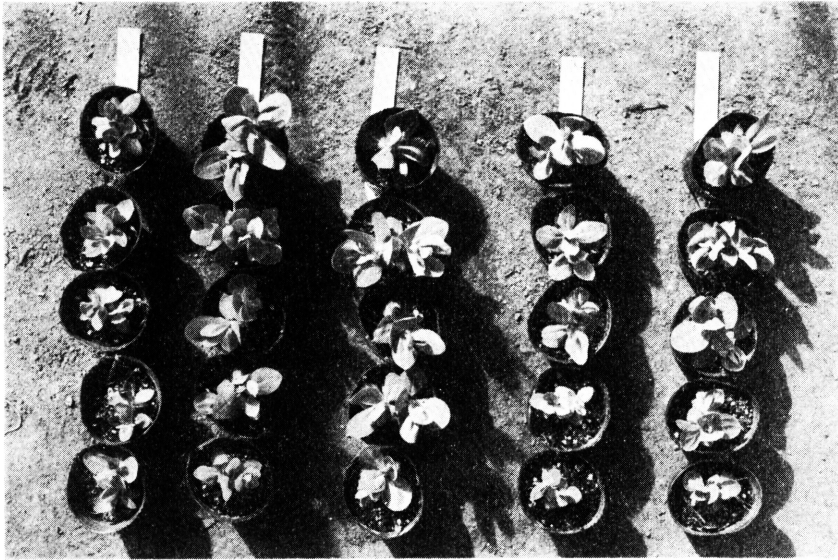
考えられる。特にトルコギキョウやシネリア、ペゴニアなどの微細な種子による育苗にはその能力を発揮するのではないだろうか。

**おわりに**

以上、生産の面から与作V1号の活用について検討を加えてきた。しかし、忘れてならないのは鉢物という商

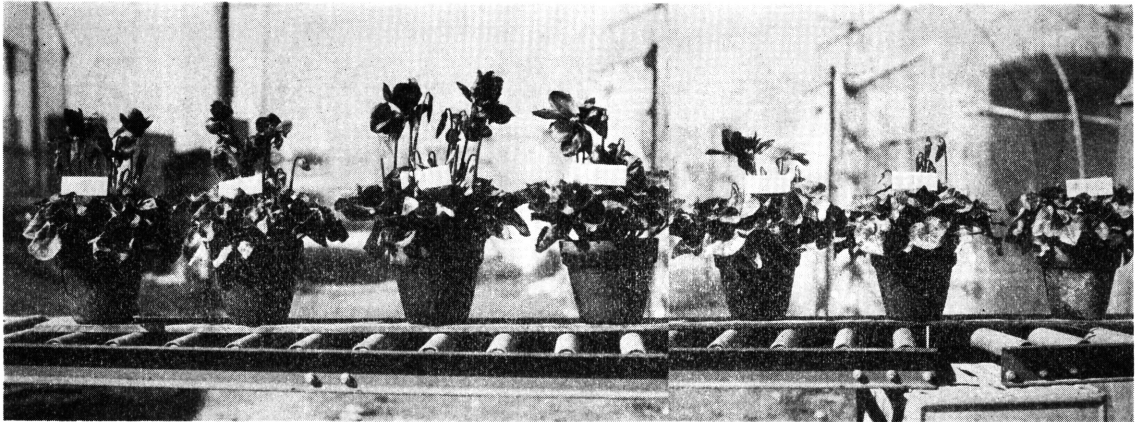
品は消費者にわたってからも生育を続け、灌水等の管理を要する点である。消費者の側から鉢物用土をみた場合に最も重要な点は、管理が簡単でだれにでも管理できることであろう。今後の鉢物用土の検討にはこの観点からの検討も加え、消費者が安心して買える製品づくりをめざしていかなければならない。

第2図 トルコギキョウの生育に及ぼす与作の影響



慣行土	1	4	3	2	1
与作	0	1	1	1	1

第3図 与作V1号がシクラメンの生育に及ぼす影響（'84年11月12日撮影）



注右より 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7区